

「平安文学にみる“高名の帯”」

國學院大學講師 飯沼清子

こんにちは。飯沼でございます。

ただ今ご紹介にあずかりましたが、こちらに足を運ぶきっかけとなりましたのは、ふとしたことから、相内さんの目に私の論文が止まったというところからであります。そして、色々このフォーラムに至るまでにお話をさせて頂きました…。

その中で相内さんが仰っていた言葉なんですけれども、「色々な文明が世の中にはある。しかし、これから生き残っていくのは、歴史と文化なんだ」というお言葉でした。実は、私のこの平安文学の「高名の帯」について書いた論文は大変古くなりまして、もう少し私が、まだ幼かった頃のもので、ですので、最初はためらいもありましたけれども、相内さんのそのお言葉を聞いて大変感動しまして、少しでも何かお役に立つことがあれば…ということで、今回、この講演をお引き受け致しました。そんなことが色々と頭に残っておりましたもので、ご紹介致しました。

こうした文化や歴史を大事にするということは、非常に重要なことだと思います。

たまたま、私が以前研究した「石帯」という貴族の装束、“束帯”について、それに注目してくれたこと、また相内さんの目に留まってくれたということに、何か、今回、大変私は有難く思っております。そちらに「石帯」の一部が展示されてあります。これは実に、単に装束の一部であるという以上に、実は大変大切なものだということを、まず申し述べさせていただきます。

タイトルにありますように“平安文学”。私は文学の研究者でして、少しは歴史のことに詳しいかのように受け止められている節もあるのですが、ただ精一杯やっているだけのことでして、そう詳しいということではございません。「高名の帯」というタイトルですが、実は簡単にいうと、これは家宝をめぐる話であって、皆さんのご自宅にも何か家宝といえるような、或いは、自分が大切にしているというものがあつたら、そういったことを心に置いて頂いて、そして、お聞き頂ければと思います。

この“高名(こうみょう) ”、或いは“高名(こうめい) ”、これは、世の中に知られていること、由緒あるものですね…。そして、そこには人々の憧れですとか、羨望、また、そのものを自分の物にしたいという物欲、そしてまた、所有者の得意顔、また、所有者の手に入るまでの様々な経路、そういう色々な思いが、実は文学作品にも描かれていることがあります。そうした物語の作品の世界に描き出される、そうした人の心を裏付けるものの一つに、実は貴族の日記というのがあります。

これからお話の中にしばしば登場します『御堂関白記』や『小右記』など、それがそうした裏付けの一つということになります。“平安文学”という非常に大きな題目ですけれども、今日は、これが殆どと言っていいのですが、『うつほ物語』というその物語に限定して、私の思いを述べさせ

て頂こうと思っております。ただ、物語と言いましても、その裏付けをする資料との両面から、この“高名の帯”に対しての「人間がどういう思いを抱いていたか…」、そんなことを少々述べさせて頂きたいと思えます。少しでも古代の人と何かを共有して頂ければ…と、いうふうに思っております。

それでは、皆様のお手元にも私が作りました資料がございます。最初、「この資料は少し分量が多すぎたかな…？」とも思ったのですが、倉本先生の資料を見て、「あっ、まだちょっと軽い」と、安心しました。(微笑)

この(資料の)一枚目の『うつほ物語』の「高名の帯」と太い字で書いてあるところですが、これは、ここにも説明がありますように、『源氏物語』に先行して成立した長篇の物語です。実は、作者も成立年も不明というしかない…。『源氏物語』は約千年前。それよりも30年ないし50年位前にはできたのではないかというふうに言われております。

そこで、その一枚目に図のような書き方をしました。これを説明すれば、実は後ろにあります本文の資料、資料「本文」というのが、後ろに一枚目から三枚目まであります。これをほぼ語っているという図なんです。最初にちょっとその図を見て頂きたいのですけれど、まず、「橘(たちばな)」という家が物語の中に出て参ります。「橘家」。

その橘家に、実は、この話の中心になります“高名の帯”が伝わっております。後で本文を見て頂きますが、累代に伝われる帯、「五継六継と伝われる帯」、「五代六代と伝わってきた帯」ということです。そして、その橘の家に伝わってきた帯を今まさに所有していた、それが「橘千蔭(ちかげ)」という人。この人は後に出て参りますが、「小野の右の大殿(おとど)」、「小野の右大臣」と出て参ります。この橘千蔭という人の左右に二重線が引いてありますが、実はこの人には、「北の方」が居りまして亡くなってしまっています。その千蔭と北の方の間に忘れ形見の「忠こそ」と言われる人物が居りまして、この人は、非常に聡明な可愛らしい少年に育ち、後に麗しい青年になっていく訳ですが、その千蔭と北の方の間の忠こそ、そして、(資料)図の左の方を見ますと「一条北の方」というふうに書いてあります。

少し説明が不足しておりますが、実はこの人は、亡き左大臣である「源忠経」という人の妻だった。その人が一条に住んでおりまして、自分の夫が亡くなってしまった今、誰か相応しい良い人が居ないかと探したら、奥様に死なれた橘千蔭が居りまして、「あれだ」というふうに目を付けます。そして、その千蔭を何とか自分の財力を傾けつつ、言い寄って自分の所に通わせるようにしてしまいます。そうこうしているうちに、息子の忠こそは、十三、四のきれいな青年に育っていくわけですが、実は千蔭だけでなく、その息子の忠こそにもこの北の方が目を付けてしまう。

登場時に千蔭が三十余り、一条北の方が五十余りと言われていて、その五十四の一条北の方が、十三～四の少年、或いは青年の忠こそにも目を向けてしまうわけです。そして、何とか自分の思うとおりにしたいということで、一所懸命忠こそにも文を送ったり色々とするのですが、相手にされません。それで謀ったことが何かと言いますと、何とか憎らしいので恨みを持って、この忠こそと千蔭の親子の信頼と愛情を断ち切ろうというふうに謀る訳です。

それがその橘家に伝わった、親からの、また先祖代々から伝わっているその名高き帯を、それを

何と忠こそが売ってしまったということにして、その親子の信頼と愛情を断ち切ろうという、そういうことを考えつきます。(資料図の)北の方の所にちょっと黒いハートの印をしたのですが、そういう北の方の汚い心を示そうと思って、ハートを黒くしました。(微笑)

それで、その北の方の企みはどういうことになったかと言いますと、少しこのお父さんに疑われてしまった忠こそは、自分自身に失望してしましまして、突如、出奔(しゅっぽん)してしまします。そうしたことが起こります。“橘家の帯”というのは実は、(資料図の)左の方に「嵯峨帝(さがてい)」という帝の名前が書いてありますけれども、前からこの嵯峨帝は、千蔭の帯を見て、「この帯奉らば位をも譲らむかし」と、「この帯をもし私にくれたなら、自分はもう位を譲ってもいい」と、“天皇の位を譲ってもいい”位に思わせる石帯…。そういったものの存在がこの物語に描かれています。

後にこの帯、忠こそが出奔してしましましたので、またこの人は、“真言院の律師”という偉いお坊さんになりますが、もはや橘家には、この帯を受け継ぐべき子孫もいなくなる訳です。そうして、千蔭は、結局はこの帯を嵯峨帝に献上します。そして嵯峨帝から次の朱雀帝(すざくてい)に譲られます。そして後に、後半の主人公でもあります、『うつほ物語』には「藤原仲忠」という人物が出てきますが、この仲忠が、お祖父さんであります「敏蔭(としかげ)」という人が残した漢詩集、そういったものを朱雀帝に進講(しんこう)します。そして、その褒美として仲忠は、朱雀帝からその帯をもらうということになります。

この仲忠はある時、真言院の律師、かつての忠こそに出会う場面がありまして、「これは、本当にあの帯か？」ということで、真偽を確かめるのですが、そして、それが本当であれば「それをあなたに返却したい…」と。しかし忠こそは、もはや僧となってしまった今の身の上には、「どんなに立派なものであろうと、この帯はもう不要である」ということで、申し出を断るということになります。そしてそれが、その仲忠の物になるということになり、そうした永い時を経て伝わってきた、また人々の憧れであったその高名の帯を手にしたことによって、今度は仲忠家が、将来は繁栄していこうというふうなことを想像させる、といったような筋書きなのですが…。

実はこうした石帯というのですが、本当に家の存亡にも関わるような大事な位置を占めて、そして物語の中に登場してきます。それほど重要な石帯というものがこの世に存在したのだということを知っておいて頂きたいと思います。“帯”というもののために、思いも寄らぬ人生を歩むことになってしまった…。そういう感慨が一挙にあふれる描写が後ろの方に出て来るのですが、それを、少しずつ見ていきたいので、それでは少しずつ本文をご覧下さい。どんなふう書いてあるかということだけ、『うつほ物語』という文章から少し香り立つものを感じてもらえばと思うんです。

資料を見て下さい。『うつほ物語』の本文ですが、括弧1とありますね。1ページ…。最初に出てくるのはこの「忠こそ」の巻。先ほど図で示しました下線Aというところですが…。

「父おとどの御もとに、祖(おや)の御時より、次々伝はれる名高き帯、内宴にさし給へりけるまに、一条殿に置き給へりけるを、この北の方、取り隠し給ひて、「失せぬ」とののしり給ひけり」。

千蔭は、帝のもとで、私の宴会があるのですが、その内宴という会に使った。そして、途中自邸にもどらずに一条北の方宅に泊まり、そして、そこに置き忘れてしまったという。実はここが非常に大きな元ということになります。

その次に、その五行目にですね。「五継六継と伝はれる帯を、かく、わが代にしも失ひつることとて、心を惑はして嘆き給ふ」。それほどの家宝を、もし自分の代で無くしてしまったら…。その千蔭の動転というものは計り知れないものがあります。

そして、この帯のことにふれるのですが、次のところですね…。「大嘗会・今年の内宴になむさしつる」の“さしつる”というのは、帯の余った部分を後ろに差し込むことで、帯を締めると言わず、“挿す”というふうに言っております。「大嘗会の年さしたりしを、上、御覧じて」、嵯峨帝がご覧になって、「この帯奉らば、位を譲らむかし」と仰せられしを」、そして、この時忠こそは、「思う心ありて」、つまり、もし自分に子供が生まれたら、その子に与えたいという思いがあって、帝には奏上しなかった、奉らなかった…。それなのに、心苦しくもこうして失くしてしまったと言って、嘆いたとうことです。

次のところ、十行目に近いのですが、その謀(はかりごと)をした一条北の方は、自分の所に居る博打を呼び出します。これで“博打(ばくちうち)”と読んでおります。その博打にですね、内裏(うち)へ、内裏(だいら)へ、その千蔭のおとども参上なさり、そして上達部(かんだちめ)や親王たちが多く集まっていらっしゃる、そして尚、忠こそも居合わせるそういう時に、その内裏の蔵人所(くろうどところ)というその役所に、帝の身近な世話をする蔵人所に帯を持って行って、「これは売り物なんだ」と、売りに出された物なのだと取り出す、そうしろと言い含めます。この博打は持っていく訳ですが、これを聞いた蔵人に「在原滋家」という人がいまして、これが大変ものの分別がある人で、「これはもう、何という珍しい物を持ってきたのだ」と…。今まで見たものの中にこれほどのものはない。これはあの時に、内宴に右大臣殿が挿しなされたそれによく似ている。まさかそれが、ここにこうして出てこないだろうということを思う訳です。

そしてまた、蔵人であって“左衛門尉(さえもんのかみ)”という、そういう役を兼ねた人が、その次なんです、これはもう帝がご覧になって「奉れ」というふうに仰ったのに、千蔭のおとどが、「これはその…、累代に伝わっている帯である」と、千蔭が、「後生、子孫が出て生まれて来なかったならば、その時に奉りましょう」と仰った。だから「忠こそその帯ではないか？」というふうなことを言う訳です。そしてこれを帝の所に持って行きまして、「どうもこれは売りに出されたらしいですよ」と言うことを、帝に申します。そういうふうに、あの時自分が「献上しろと」言ったのに、思いがあってしなかったものを、これをこのようにして図らずも、こんな形で自分の目の前に在るということで、帝はご覧になって大変驚かれる。あれは、あの時、千蔭のおとどは、「自分が欲しい」と言った時は、「子孫が生まれて出てきた時は、その子に取らせたい」と言ったのに、それは、最初から売るつもりだったのだな…。「何とけしからない」と言いまして、そして、千蔭のおとどを召しまして、「あんなに出し渋っていた帯は、売りに出されたのだね」といってお笑いになる、とこんなふう書いてあります。

そして、それを見たおとどは大変驚きまして、「これは盗まれたのだ」と…。「忠経の朝臣の家に

て盗まれ侍りし帯なり」と、書いてあります。だから、よろづの神仏に出てくるようにと祈った。そして、帝の元からその帯を受け取って、その時売りに来た博打をですね、左衛門の陣に連れて行って、そして色々と役人に経緯を問い質せたところ、博打は責められまして…。その北の方の謀を申し上げたと、ここには書いてあります。

右大臣の千蔭のおとどは、まさか忠こそがそういうことはしまいと思うんですけど、ちょっと疑いの心が出てしまう。忠こそには、そんなことがあったとは言わず、また、一条北の方にも「この帯が出てきましたよ」と仰られ、何も言わずに帰ってくるというふうな話がここに書かれています。このところで“売りに出す”というようなことが出てきて、割とこういう事は行われていたらしく、他の記述からも伺えます。

それで、次の巻は大分進みまして、本文の2ページ目になりますが、(資料『蔵開・中』巻より)「上、世の中に名高くて伝はり来る御帯あまたある中に」と、場面は進みます。少し前に戻りますが、先ほども言いました仲忠が帝に御進講する、その時に、すばらしい帯をお取り出しになって、仲忠という大将に、“一日(ついたち)の朝拝”と書いて元日の朝賀に帝がお出ましになるその時に、群臣からお祝いのお言葉を受けるといった儀式が元日に行われるのですが、そういった時に使ったらどうかと進講の褒美として下された。それを仲忠が戴いて帰るということになります。

そして、次にその帯をですね、「帝の御前での経書がこんなふうにありました」と、自分がとても重大な役を仰せ付かったのだけれど、その時に貴重な品物、六行目、七行目になりますけれど、「さは侍れど、重物をこそ賜はりて侍る」というふうに書いてあります。これを戴いて来たということになります。そして、それを見るとですね、非常に厳重に入っている螺鈿の箱に、更に袋に入れて「御包みに包みて持て参れり」と。

このおとどというのは、この拝領の帯を見せたおとどというのは、「藤原正頼」という人物なのですけど、その左大臣のおとどがそれをご覧になると…。ここに歴史上の人物の名前が出て来まして、「貞信公の石の帯、いとかしこきなり」、何とこれは貞信公の石帯で実にすばらしいものだ…。これを見たおとどは大変驚くわけです。そして、正頼が驚いてこの石帯の経緯を仲忠に語るということになります。

11行目のところに「これは、小野の右大臣の御帯なり」ということで、この小野の右大臣は千蔭のことなのですが、この帯のことで多くのことがあったのですよと…。「それによりてなむ、真言院の律師、山籠もりにしかば」ということで、この帯が原因で真言院の律師は山に籠もってしまい、伝え得る人間が居なくなってしまったことから嵯峨院に奉られ、そして朱雀帝へと譲渡され、この帝が“かしこき御宝”というふうにしてお持ちになられたものなのだと、ここで言うわけです。

その後の中程を跳びまして、15行目以降ですね。20行目近くですけど、今度は仲忠と仲忠のお父さんであります「兼雅」という親子の会話になります。(本文資料2P『蔵開・中』)仲忠が父にこの帯を見せると、父兼雅も「これは評判の帯だ」と語る訳です。21行目に非常に興味深い記述があるんですね。「大将、『右大臣の御帯』となむ。これは、御前に候ひ侍りなむ」。これは、「父上、あなたの元にお置き下さい。良い帯をお持ちでないようですから…」。

私、仲忠は、“故治部卿のぬし”が、つまり祖父ですね、「唐より持て渡り給へりける、まだ革も

つけで石にて侍り」、その「唐から持ち帰って、まだ革も付けないで、石のままで、そしてしかもこれに劣らない物はないので、それを仕立てて、私は使いまししょう」というふうに言うわけです。

すると、父のおとどの兼正は、「どうして私が貰えようか」と。「帝の志があるような物を、やはり節会(せちえ)などに挿して帝の御前に出てお目かけなさい。私は、このような立派な物でなくていいのです」と、お父さんは言います。するとこの仲忠が、「さらば、かの侍るを調ぜさせて奉らむ」と、祖父俊蔭の遺品の石を帯に仕立てて、じゃあ、差し上げましよう」と。

次に、「いとかしこき角どもなど侍りけりや」。ここに“角”という言葉が出て参ります。

これは後程述べたいと思うのですが、どうやら“犀(さい)の角”のようです。「角などもございませぬ。そういった物をしまっておかれて、寸でのことに危ない目にあつたことも…」というふうなことも申しますと、「決して口に出してはならないことです」。これは、色々な経緯があるので、それは物語に譲るのですが、“唐から持って帰った石”で、まだ革も付けない、つまり、帯という形では調整していないそういう石があるということですか、“角”があるとかという記述に注目して頂きたいのです。

本文資料・三枚目、最後の『国譲・中』の巻、“国譲り”という、これはまさしく誰に今度は譲られるかという、位を誰に譲るかという政治的なことが描かれている巻となるのですが、その中間ですね、中の巻。その真言院の律師と対面する機会を持った仲忠が、これまでの話を聞きます。これは、仲忠とその律師・忠こそその会話になるわけですけれど、まあ、そうですね、2行目から3行目に、「その人、継母に侍りし人なり」というふうにあります。

これは、例の一条北の方のことをいうのですが、その前に、「山に籠もってしまった理由は、大変なことがありましたけれど、私は全く本当のことは知りませんでした。ただ、何とも父に疑われ、一時たりとも疑われてしまったこの身が、むやみに悲しくて、この世には在ってはならぬような気がして、そして親を見捨てて出奔したのです」ということを言ったその後です。「そのつらいことを起こした人というのは実は私の継母だった人だ」と…。そんな事がここに書いてありまして…。

今度はちょっと飛びまして、11行目の大将の言葉を見て頂きます。10行目から読んで頂きます。「いと恐ろしかりける、人の心にこそは。そのことは、左のおとどぞのたまひしや」。「恐ろしいのは人の心だ。そのような疑惑のあつた帯は、私仲忠のもとにあるのですよ」と…。

“故おとど”、千蔭のおとどが失くされた、「失せ給はむ」、「失くしてしまった」といって、「忠こそがいたら忠こそに譲ろうと思っていたのに、今はそれを誰に譲れるものだろうか」と仰って、“院”、これは嵯峨院のことになりますが、嵯峨院に仰って、嵯峨院に献上してしまった。それを「内裏(うち)になむ渡りてけるを」。この“内裏”というのは、次の朱雀帝のことを指しております。朱雀帝のところに渡ったのを「去年(こそ)の師走(しわす)に」、去年の師走にですね、「御書(おんふみ)」この特書ですけれども、「御書仕まつりしに」“御進講した”という時に、禄(ろく)として下さいました。誠にこの世に二つと無いすばらしい宝物です。このようなものを一条北の方が、このようにしたことは恐ろしいことです。

これを聞いた律師、忠こそは、「そういう災いに遭つたのですよ」というようなことを申しました。大将は、「その帯は、ものし給はましかば、御物とこそならましか」。「あなたが出家なさらな

かったならば、あなたの物になったでしょう」と…。『奉りてむ』となん思ひ給ふる。「これは、あなたに私はお返をしようと思うのです」。すると律師は、「山臥(やまぶし)は、何の料にかし侍らむ。僧の具に、玉の帯(ごく)差し侍らばこそあらめ。持て侍らましかば、とかくのこと、殿ばらにこそ奉らましか」。僧の具として玉の帯を差すのならともかく、そうではないのですから、もうあなたに奉りましょう」というふう仰った。

17行目、18行目辺りですが、「律師見給ひて、いみじく泣き給ふ」というふうに書いてあります。先ほども言いましたが、この帯のために自分の人生がこうも変わってしまった。様々な思い感慨が、忠こそその心に去来して一気にあふれ出た、そういった文章です。

これは、『うつほ物語』に描かれている文で、皆様もこのような良くないことを企んだ、あの北の方は、その後どうなったのだろうという思いになろうかと思うのですが、時間があつたらお話し致します。気になるかも知れませんが…。

今、企みの話をしましたけれど、まず、物語のまとめと致しましては、この橘家の、帝が「祖の御時より、次々伝はれる名高き帯」を手に入れたと言ったのは、勿論、その帯を所有している橘家そのものに流れてきた長い長い時間、そして、帯に思いを馳せた人の心を、それをまた掌握したかったのだろうというふうなことが思われます。

それだけ家宝といわれるものには、膨大な時間と人々の思いというものが濃縮されていて、また、それほどの家宝を手放すということは、即ちこの家の繁栄が、後には没落、滅亡へという将来を予測させます。ですから、橘千蔭という人は、この家宝を一条北の方の屋敷に置き忘れるべきではなかった、ということになります。そもそも、あまりにも言い寄られたからといってふらふらとならなければ良かった。そういうふうな思いになるわけです。

後継者のいなくなった千蔭は、ついには、帯を嵯峨天皇に献上し、帯は朱雀帝に引き継がれますけれど、報償によって帝を感嘆させた仲忠に下賜されることになる…。そしてそれは、仲忠という人の主人公としての性質、それを一層強め、また高めることになりまして、その帯には新たな命が宿ることになる。ですので、この『うつほ物語』の“高名の帯”として出てきますこの帯は、家の存続、或いは、断絶といった重大な事柄を物語っている。それほど文学という世界に置いてこの帯という存在というものは、非常に大きいものであるということを、少しオーバーであるかも知れませんが、是非、皆さんにお伝えしておきたいと思います。

帝が、位を譲ってもいいと思うまでの帯とは、一体、どんな物であろうか…と。疑問といたしますか、私も関心・好奇心が強いものですから…。しかし残念ですが、日本では、“これほどだったなら帝の位を譲ってもいい”というふうなまでの帯は、今までのところ見たことがありません…。

私が思い出しますのは、上海の博物館、そこに“玉”というものだけを扱う「玉の部屋」がありまして、そこで見た玉の素材です。その時は、私は、「なんて美しいのだろう」と、少し大げさに言えば、魂を吸い込まれそうな程、感動したことがあります。本当にきれいな玉でした。そうした私の個人的な思いは別として、先程来、物語にも出てきましたこの貞信公、その“貞信公の帯”について、その実在性というものに少し迫ってみたいと思ってみた訳です。

「貞信公」というのは、皆さんの歴史的なつながりで思い出されるのは、丁度、あの平将門が暴れ回っていたあの頃の摂政、関白、“都一の人”とされていたのが貞信公でした。「藤原忠平」と言います。そしてまた、小倉百人一首の歌を思い出される人もあるかも知れません。「をぐらやま峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ」この歌は、貞信公の歌です。宇多法皇（上皇）の御幸に従ったときの歌で、実は、それまでは紅葉といえば、「竜田川…」だったのに、小倉山が紅葉の新名所になったのは、偏にこの貞信公の歌であったと…。宇多上皇の御幸によってこの小倉山が紅葉の名所として注目されたというふうな話もあります。

貞信公につきましては、本資料の、最初の1ページ目に戻りまして、1枚目の「二」番目のところを見て下さい。「忠平、貞信公について」。この忠平の子孫を見ますと、嫡男に藤原実頼がおります。実頼の三男になりますが、跡を継いだのが「斉敏(ただとし)」という人なのですが、この人が亡くなってしまい、孫に当たる「藤原実資(さねすけ)」が実頼の養子となります。

“貞信公の帯”ということですから、本当に貞信公は、どういうふうな帯を持っていたのであろうかと思ひまして、忠平が書きました『貞信公記』という日記があります。延喜7年〔907〕から天曆2年〔948〕までの記録が現存しているというふうに言われております。この『貞信公記』をながめておきますと、少しだけ記述がありまして、天慶2年〔939〕8月7日の記録です。「烏犀純(巡)方帯一腰給内記直幹、聞無帯、」と読めます。「橘直幹」という人物に「烏犀(うさい)」というのですから、“黒い犀”の帯。石ではなくて、そういったその材質が“角”でできている帯です。それを直幹にどうも与えたと、そういう記録です。

直幹という人は、生没年不詳ですが、「直幹申文(なおもと もうしぶみ)」というもので非常に有名ですが、この人はどうも「烏犀巡方(ずんぼう)の帯」、従五位上として大学頭(だいがくのかみ)になったり、或いは、大内記に任命されたりと、そういった時に挿す帯がないということを知ったのでしょうか？困窮の生活であったらしいことが、申文からも伺われるのですが、忠平が直幹にそれを与えたという記述が見えます。

また、逆に忠平が村上天皇に玉の帯を献上したという記述が、当資料の②にありますけれど、同じく『貞信公記』の天慶9年7月19日の記録で、「臨還御時、御釵・玉帯献 今上、」という記録です。勿論これは、「天皇に玉の帯を献上した」ということですが、どの程度の帯・玉なのか、そういったことはわかりませんが、このように天皇にも献上しているということがわかります。

次の③の資料が、よく「帯」の事といますか、『うつほ物語』の注釈時などにもこの記述に出会うのですが、今度はその子孫であります実資が、“貞信公の帯”を質から取り出したというそういう記述が、この実資が記した『小右記』永祚元年(989)の記録・日記に出てきます。

「二日、癸亥(みずのとい)」とありまして、室町殿の“白玉・巡方の帯”という、室町殿というのは、しばしば『御堂関白記』などにも出て来ると思うのですが、実資のお姉さんがどうやら居た所で、実資のお姉さんは“室町の尼君”と謂われたいた。勿論その実頼のお子さんであるわけですが、その室町殿に譲られたらしきその帯が、何がしかの事情で、それが次にあるように「藤原永頼」のところに置かれていたという。それを実資が取り出したという記事が見えるのです。

室町殿の“白玉・巡方の帯”(貞信公御帯、故殿傳給御帯也)というふうな注があります。ここにも“貞信公の帯”という記録があり、「年来往永頼朝臣許、今日出取了、(置質百貫之)」という

ふうに書いてあります。百貫、一貫は銭の単位ですが、標準で換算したら一体いくらになるのだろうと、そのような時間もなくて、換算はして来なかったのですけれども、『うつほ物語』にもですね、「忠こそその帯・千蔭の帯は、“千五百貫で売るのだ”と言え」と、博打に言っているわけです。銭千五百貫で売りに出したということです。その同じ『うつほ物語』の「吹上」という巻には、太刀(たち)・刀が十五貫で質に出されたということがありますので、そうすると千五百貫という帯の値段は破格な物で、それほど高い値段で売りに出したことを、この北の方は謀ったのですね。

現実に戻りまして、実資が受け取った、取り出したこの帯は、以前に質百貫で売りに出されたと言います。それを取り出すにあたって実資は、「功德として千石を致さん」ということなので、追加して千石を、これは米でしょうか…？追加してそして、それを受け取った。即ち「その値を弁(わきま)え 留めしむるところなり」という記述です。高名の帯というのは、いろんな経緯を持つものだということがわかります。

後年ですけれども、同じ『小右記』寛弘8年(1011)2月19日に、実資が、“貞信公の帯”を夢に見たという記述があります。「今暁(こんぎょう)」というふうに書いてあって、実は十九日の暁方に非常にいい夢を見たと書いてあります。夢に、その忠仁公(ちゅうじんこう)の御許に、“忠仁公”とは「藤原良房」のことなのですが、「二度にわたって夢を見た」ということがありました。忠仁公のものを伝えたとのことなのですが、非常に記すことが多いのであえて書かないということがあります。そしてまた、先年というふうなことで、次の記述に移るのですが、「亦、前年夢に貞信公の累代の純(巡)方の玉の御帯を見給う」というふうにあるので、“貞信公の帯”はその子孫にとっても非常に大事な物であるという印象を与られます。

次に⑤の資料は、本文を省略しましたが、説話でありまして『続古事談』という説話の中に、「小野の宮家に伝わる玉の帯」を、つまり実資の家に伝わっている玉帯を、“宇治殿”、これは「藤原頼通」で、藤原道長の長男ですね。宇治殿の手に渡りかけたのだけれども、実は実資の愛人であります「スミ殿」という人がいて、『古事談』によりますと、この人は“極めて賢女なり”と大変賢い女性であると出てきます。その賢女、スミ殿の機転によって戻るといふ話なんです。

何とか「その帯を見せろ見せろ」と言っていて、頼通が言ってくる。この人はあえて断らないで、「どうぞ」と言っていて渡すんです。そうすると頼通に対して、スミ殿は、あえて「返せ返せ」と言わないでほっておくのですね。そうすると頼通も持て余してしまって、返って来たということで、その「小野宮ノ右大臣ノ思人スミ殿、賢女足ルコト」といふ話なんです。小野宮に伝わる玉の帯というのがあった。ですから、この“貞信公と帯”というのは、この物語の中にも使われるということがよくわかります。

この忠平という人には、お兄さんに「藤原時平」という人がいました。この時平の死後、話をおもしろくすれば、時平は「菅原道真」の怨霊によって滅ぼされてからということになるのですけれども、時平の死後ですね。代わりに氏長者となりまして、摂関家の基礎を築いた人物がこの貞信公です。そういう家に立派な石帯があったということは、想像に難くないわけでありまして、物語が、“貞信公の帯”だといふふうな記述をしたということは、「なるほど」といふことを考えさせてく

れる、こういう訳です。

さあそれで、忠平の家に伝わった帯と、そして、先ほど倉本先生がお話になりました「藤原道長」にまつわる帯のいろいろな話、そういうものがまた、さまざまな『古記録』の記述をたどることによって出て参ります。道長は、実は忠平の子であります、その実資の弟で「藤原師輔」という人がいた訳ですが、その師輔の孫になります。この道長とその嫡流の人々にもこうしてまた帯に関する記述が、色々な記述に確認できるということなんです。

私は、次に、“御堂宝蔵”というタイトルで、「道長の高名の帯」というふうな題を付けました。この御堂宝蔵、先ほど「法成寺」というお話が出ましたけれども、そのことをちょっと思い出して頂ければと思います。道長から、後の「九条兼実」までを少しそこに書き記したのですけれども、実は、後にですね、ここに資料④と⑤とを上げました。

『江談抄(ごうだんしょう)』という記録には、これは説話集ですが、これは“江”とは、大江の出である「大江匡房(おおえのまさふさ)」の話したことを、弟子の藤原実兼が記録したものです。その中に帯の『芳名録』という一群があるわけですが、その中に帯の名前が色々出てきます。「唐雁(とうかり)。落花形(らっかがた)。垂無(たりなし)。鵝形(がけい)。雲形(くもがた)。鶴通天(つるづうてん)。鶯通天(おしづうてん)」というふうな名前があります。その中で、特に帯は、唐雁、落花形というふうにごう書いてあるのは、多分この二つが特別すばらしいという意識があったからだと思います。「ともに御堂の宝蔵に在り」というふうには『江談抄』には謳っております。

それから同じ名前が出てきますけれど、少し時代が下りまして鎌倉に入ってからですが、『二中歴』という、いわゆる人文関係の百科辞書のような文献があるのですが、その中の「名物歴」にも、帯という項目で、「垂無、虎刈一云雁、虎刈り」と在ります。これは「唐雁(とうかり)」の「う」が「ら」の書き写しの間違いじゃないかと…。どちらかが正しいのでしょうかけれども、そうではないかとも云われております。

「落花形 鵝形 鶴通天 鶯通天」という共通の名前がここに挙げられております。「唐雁と落花形が、ともに御堂の宝蔵に在り」という記述に注目してみたいんですが、まあ、他にも文献を見ますと「鬼形」とか「獅子形、唐花」とか、そんな名前を見ることが出来ますが、とりあえずこの二つの種類の文献を挙げてみました。

また次に、①番から色々な記録が出てきて、『左経記』と云われる記録ですね。これが①番ですが…。万寿5年(1028)の4月8日の記録です。「八日癸酉、天晴」とありまして、「関白殿」、これは頼通のことですが、仰せて曰く、「今日以後故殿帯劔等、皆令納法成寺蔵畢」(今日以後故殿の帯太刀等皆、法成寺の蔵に納め令め畢わぬ)、その中に実は、名前が出てくるのですが、「東宮の鶴通天」。この右側にありました。鶴通天は“故殿”のですね。「御存日に献ぜられ畢わぬ」、どうやら道長の存命中に、東宮に献上された物のようです。「同鵝形依遺言今日献之」同じく鵝形、遺言により「今日献ず」ということで、鵝形が献上されたということなんです。

この鵝形という帯ですが、実は左に※印をしておきました。これは、『兵範記(へいはんき)』という記録の中にも出てくるのですが、鵝形は「物體珍重也」、もったい珍重なり。そして、その下、文字一字抜かしてしまったのですが、「美麗無物也」美麗極まりなき物なりという、無と

物の間に「極」という字を、南極とか北極とか、極まりの極を入れて下さい。“美麗極まりなき物なりといわれる帯”があったということがわかります。

今詳しいことは、述べられませんけれど、『兵範記』の帯というのは、後に有名な「藤原頼長」という人の次男の「師長(もろなが)」の元服の際の記述なんです。それよりも前にも『中右記』にも、この鵝形が実は、宇治の宝蔵にあった物を今朝取り出したというふうに書かれていまして、東宮のところからまた戻ったのかという気がいたします。この時は、関白の忠実の嫡男の忠通の元服の時に使われたと、先祖の使った帯をまた受け継いで使うと云うことは、この時代の貴族の心だったのだろうというふうに思います。

いくつか有名な話に出てくる帯は在るのですが、いろいろちょっとまだ述べられないことがあるのですが、そのような帯がありまして、次の②番ですね。先に行きましょう。堀川の天皇の母后(ははきさき)であります「藤原賢子」という人の国忌ですね。その時に、行事の蔵人の失態によって、帝が使うべき帯が用意されていなかった。それで、大殿(前太政大臣師実)が沙汰をして法成寺の宝蔵の帯を献じたという、それが『中右記』の記述です。

「法成寺の宝蔵の内にある巡方にある帯を取り出ださる。奉られしたもう間、光景推遷、既に昏黒に及ぼんと欲す」どんどん時間が迫ってきて、暗くなってしまった。帯が用意されていなかったために…。「酉時許御帯被献(酉の時ばかり御帯献ぜらる)、則従額間御出(すなわち額の間より御出あり)」こういう記録なのですけれど、こうした話も出てきます。

それからよく引用されるものですが、③番。少し駆け足で申し訳ありませんけれど、次は、『玉葉』という、記者は「藤原兼実」という人です。道長からして何代目かの子孫となるわけですが、本資料2ページ目の図にも書いてある兼実です。「法成寺の宝蔵を開いて、黒塗りの円い桶の帯箱を三つ、三合取り出したところ、瑪瑙と犀角の巡方の帯と、それから犀角の丸柄(まるとも)の帯」があったという話です。巡方(ずんぼう)というのは、石の形が四角。丸柄というのは、おおざっぱにいうと円いということなのですが、今日は、そういう物質的なことは、少し置いておくのですけれども、これも細かな記述が『玉葉』にあります。

「今日、法成寺の宝蔵を開き」、初めて開きですね、「帯箱三合を取り出す」というふうにあります。「上の桶は玉」、玉の所に案ずるが瑪瑙とあるので、瑪瑙の帯であろうと読めます。そして、注がありまして、[この中、巡方瑪瑙一筋在り、世間にある所の瑪瑙は、皆丸柄なり、このほかに巡方無しと云々]、巡方瑪瑙の帯というのは、大変有名な物のようだったようで、これを借りたいとかこれに応じて道長が貸したとか、そういう話が出てくるのですね。「中桶犀角巡方(中の桶には、犀角巡方)」、ここにやはり犀の角の巡方の帯の存在がわかります。[此中烏犀丸柄一筋相交(この中に烏犀丸柄一筋相交じる)]とあります。「下桶犀角丸柄(ママ)并帯員廿六筋也(下の桶は犀角丸柄、併せて帯の数二十六筋なり) 此外第一桶(このほか第一の桶に)、被加納目六一巻(目録一貫を加えて納められた)、紅梅色紙書之(紅梅の色紙にこれを書くとか)、年號奥有宇治殿御判署(年号の奥に宇治殿の御判署があるとか)」、このようなことがここに細かく記されている。

このように、道長の所にもどうやら人が是非使わせて欲しいと思った帯とか、珍しい帯が仕舞われていたということがわかるんです。そういう記録とともに、そちらにあります「六ヶ所村の石帯」

とおぼしき帯の素材に思いを馳せて頂いて、“こんなもの”と思わないで、人の心を時々惑わせました、そういう物体なのだと言うことを、是非気持ちの中に留めて頂きたいと思うのです。

さあ、もう少し時間があるかと思うのですが。次に、私が、“通天の帯”というものをここに書きました。今回、ちょっとその玉帯とか石帯とか、それだけに限ったほうがいいのだろうかと思いましたが、私の関心もちょっと聞いて頂こうと思ひまして、この『江談抄』とか『中右記』に出てくる「鶴通天」とか「鴛通天」という名前、こんな所にどこまでわかることができるか少々突っついてみようというふうに思ったしだいです。

それで、「通天」というのは、どうも天の気を取り入れる“靈力”を思わせる言葉だというふうに見えるわけですね。最初にこの、そうですね、『桃花薬葉(とうかざいよう)』という記録がありまして、これは一条家の故実作法とか伝来の記録とか、いろいろなことを記した書物なのです。その中に「斑犀(はんざい)の帯」これは、斑(まだら)の犀の帯、多分そういうことだろうと思うのですが、「鶴通天 鴛通天」という名前が出てくるのです。それとですね、一番初めに、忠平が、貞信公が橘直幹に“烏犀の帯”を給うというふうな記述でありましたけれども、帯のことを記した故実書に寄りますと、“烏犀の帯”というものは、六位以下に許すんだけれども、“通天の”のあるもの、つまり、文様のある物はその限りではないと。どうやら、犀の角でも、無地のような物に較べて、何か何某かの文様のある物というものは、貴重な物であつたらしい。そういう風なことがわかります。

“通天の帯”という存在は、ここに挙げた記録以外にも、見つけることが出来るのですね。

さあ、それで、斑犀の帯の鶴通天と鴛通天ですが、鶴通天とは、丸鞆の帯だというふうには『台記』には出てきません。『台記』の仁平元年(1105)2月22日ですけれども、その中に、「鶴通天と丸鞆」が出て参ります。他に出てくるのが、以下に挙げまして『殿暦』とか『台記』、或いは『傍抄』というふうなもの、あるいは『兵範記』といった日記。こういうものにも、「御堂鴛(鴛)通天」というふうな形で出てきます。

他にもちょっと述べたいと思いますが、まず、諸記録に出てきます「通天の帯」の存在です。“通天”という言葉は、先ほど靈力を思わせる言葉だと云いましたが、「天に通ずる」ということですね。次に、三つ程度意味を書きおきましたが、私が引いた『大漢和辞典』と「漢語大詞典」という中国の辞典です。それを見ますと、どれも「通天犀」の略を“通天”という。それから、「通天御帯」あるいは「通天宝帯」と書く。これはどういう物かというのと、「通天犀の角で飾った天子着用帯」だというふうには辞典には出てきます。もう一つは、「通天花紋犀」という言い方が出てきて、犀角の百物の形を備へてあるもの。犀の中で最も貴いもの」というふうに出て参ります。どうも犀の角に何らかの模様がある物を“通天”と呼んだらしいということがわかります。

私は、「犀」というのは、動物園でしか見たことがありません。ましてや犀の角の断面など見たことがないのですが、実際にご覧になったことがある方がいらっしゃったら、教えてもらいたいと思うんです。それで、この「通天犀」、今この資料には挙げてはいないのですけれども、『文集□□』『□□往来』ともいいますが、手紙を集めた文献がありまして、それを見ますと、「通天犀」の記述が二つぐらい見えるのです。「累代の物を最も珍重すべし」というふうなものがあるって、「通天犀」というのは、「外形の気無しといえども、尚、切り金の金に勝る」といったような言葉が見えまして、これを注釈書で見ますと、通天犀の角は、白、あるいは赤の模様・紋里があるのですが、

それが「群鶏」、群がっている鶏を驚かすので、この外形の犀というふうに着るのだという物が出てくる。或いは、「通天犀」というのは、闇夜でも光を発するのだというふうなことも出てきます。

それで、宋からの商人が、太宰府にやってきて、その中に珍品の購入を是非勧めると云うことになるというところが出てきます。やはり異国から日本にやって来ていたのだろうと思わせる記述です。そのように“天に通ずる帯”ということなのですから、一体「天に通ずるということはどういうことなのだろう」と思いました。

それで、すみませんが、最後の4ページ。これは、「ア」と「イ」と「ウ」と、少し引用しておいたのですが、これは武田雅哉という中国文学と申しますか、その方が書かれました『桃源郷の機会学』という本がありまして、その中に、「月をみるサイ」という項目があるのです。私は、この本を読んだ時に、猫の代にこんなにおもしろい本があるのだとかというくらいおもしろく読んだのですけれども、まず、そこで紹介されています。「ア」と「イ」と「ウ」を読みたいと思います。

“陳蔵器”という何かおもしろい名前ですね。その『本草拾遺』（八世紀）という本の中に、「通天犀なるサイの角は千年かかって伸び、それは根元から先端まで、白い星で飾られており、気を放射して、天に通ずるのだと説明されている」ところ紹介されています。

もう一つは、王闢之(おうへきし)の『澗水嚙談録(じょうすいえんだんろく)』、11世紀末の物ですが、「それ(サイの角)には、太陽、星、雲、月、花、山水の風景、鳥や獣、龍や魚、神や仙人、宮殿などの形が現れる。さらには、衣服に冠、目や眉、杖に靴のそろった人物、鳥獣や魚龍がすべてそろって描かれていて、さながら一幅の絵画のようなものもあり、このような逸品はたいへん珍重され、はかりしれないほどの値がつけられる、というのだ」。“通天の帯”は、どうも「霊帯」といえるようなものではないか。これは、矢印以下は、私が付け加えたものです。

「ウ」は、『本草綱目』、少し漢文的ではないのですけれど、「犀は月を望んで、紋が角に生ず 象は雷を聞いて、花(もよう)が牙に発す」。こういう言葉が『本草綱目』に見られるわけです。もう少しですが、武田氏は、次のようなことも紹介しています。「犀は、その目で見た形、特に月や星などの天体現象をその角にコピーするという説。それから、「妊娠中の犀が、空中を横切ったりすると、その形がお腹の中の赤ちゃんの角にプリントされる」ということが記されているらしい。「犀は、その目で月を眺めることによって、レンズを通して入ってきた月の画像が、角の内部にプリントされる。象が雷鳴を聞くとそれによって模様が象牙にプリントされる」というふうな考えが記されていると。

つまり、中国人は、文様のある犀の角に対して、それがどのようにしてできたかという生成の原理というものをこうして理論付けたということのようです。これは、非常におもしろい考察だなと…。それで、そんなことから想起されますことは、次のあたっているかどうかはわからないのですけれど、実は私の論文には書いてない資料です。

『中右記』の寛治五年(1091)の3月16日条に、藤原師実の六条邸で、師通という人が「曲水の」を催します。三月上旬巳の日に行われるのですが、この時は、亥の日ですね。長いので、前の方は省略しましたが、「或人云、曲水宴会之時、必用桃花石帯云々(ある人云わく、曲水の宴会の時、必ず桃花帯を用うる云々)」。今までのことからすると、どうやら桃の花の形がプリントされた“犀の角の帯”を使うものなんだよという、何か物知りな話をしたことを、『中右記』を記し

た「中御門宗忠」は、ふと、そんなことは珍しいと思って、日記の後ろの方に書き加えたものだというふうな気が致します。

通天犀、通天帯というものが、非常に記録の中に良く出てきて、なぜ、犀が珍重されるのか、漢方薬としてだけでなく、絶対何がしかの意味があるのだろうと思っていた訳ですけれど、そういうことがもしかしたら背景にあるのかも知れません…。

時間も迫って参りまして、最後に駆け足になりますが、4ページの五番のところに、「帯の値」というふうなことを書きました。これは、『御堂関白記』ですけれど、倉本先生の現代語訳ではなくて、『大日本古記録』の『御堂関白記』の全注釈を見たのですが、それに寄りますと、「所進高雅朝臣堀河邊家（進ずる所の高雅朝臣の堀河辺りの家をもって）」、「藤原高雅」という人ですね。

これは、道長とは非常に近い関係にあった受領のようですが、その人の進上した堀河辺りの家をもって、「賜三位中将乳母（めのと）左衛門、先日所奉帯代也、」という記録です。藤原兼高という人がおりまして、その人は、「道兼」という道長のお兄さんの次男なのですが、その人の乳母の左衛門という人がここに書かれています。この乳母左衛門とは、どういう人物かというとはよくはわかりません。堀河辺りの家もどれ位のものかというもの不明なのですが、また、その帯の具体的な様子というのもわからないのです。

しかしここでは、奉ってくれた帯の替わりとして、自分が高雅から進上された家を替わりに与えたということで、帯と家が等価であることとなります。皆さんがご自分でお締めになっているベルトと、良いベルトを貰ったからといって、今持っている家をあなたにあげましょうと行って交換しますか？ そりゃあ、ちょっと現代人の感覚からでは、とても考えつかないことであろうと思います。それほど、我々の生活とは違う現実が、一部に有ったのだらうと思われま。

そして、最後になりますが、次は、「通天寶帯連城價（通天の宝帯は城の値に連なる）」という漢詩なのです。宋の陸游の『韓太傅生日』、韓太傅の生まれた日ですね。韓太傅は、誰なのかここでははっきり言えない状態なのですけれど、岳飛と並んでいわれた韓世忠だと思ったりもするのですが、まだ実は、陸游の詩は一万首もあるので、日本で訳されている漢詩は、ごくごく僅かです。この詩は、現代語訳は日本で見当たりません。その私が見た段階では、陸游という人の『□□□□』という巻の五十二の中にある詩の一節なのですけれど、“通天の帯”というものが「通天の宝帯」というふうな言い方にされるような価値がある物で、しかもそれが、「城の値に連なる」。

中国において城という文字は、町一つを指します。城壁に囲まれた町。ただ単に個体である城とはイメージが違う。それほどの価値を持ったというふうなことが詩の中に出てくる。このことから考えても、帯一筋、一腰の替わりに家を与えたということは、不思議では無かろうと…。恐らく平安の知識人である知識人は、中国においてもこうした帯は、いかなる価値を持っていたかと云うことを熟知していたのだらうと思います。

平安の貴族達が叙爵しまして、従五位下になりまして、昇進して、後に参議になって、位も参議になりますと、「白玉隠文巡宝帯」（白玉で、そして文様があり、方形の形をした帯）を持ちうるようになったと記録に出て参ります。日記を見ますと、藤原実輔も行成も隠文の帯を持って内裏へ参上して、そして、その控えの間であります宿所で、それを身に付けたと記してあります。「今日は、この白玉の帯を身に着けることができるのだ」。そういう喜びの日の時に、生き生きとそうしたこ

とを書いている。参議になった喜びとか、高揚感というものが、日記の言葉の中から伝わってきます。

ですから、彼らの生活の中であって、帯は、現代では計り知れない価値観を示している物だと思います。ですから、六ヶ所村で発見されたという帯もそうした価値を持ったものに連なると云うこと…。そのことを是非とも心に留めて頂きたいと思うのです。それほどの帯を形成する玉や石や角の片端なりともこの目で見たいという私の思いを述べまして終わりいたします。

最後の最後で申し訳ありません。この資料の5ページ目に写真を載せましたが、本当はカラーなのですが、①番は、皇太子らしき人物が、黄丹の袍（おうにのほう）というのを着まして、後ろの背中のところには石帯を差している様子が、わかります。

②番は、有名な「紺玉帯」という正倉院の宝物。それから、③番は、「銀装の革帯」といって、伝菅公道真公の遺品とされるもの。これを見ますと、本当はこれはもう皆さんのベルトと同じ形をしているというのがわかると思います。6ページ目ですが、④番は、これは私が、中国でも日本でも見たことがあります。非常に美しい物です。「玉帯」。これはまた、中国、外国から来た物らしいのですが、「陝西省長安県南里王村」という所で出土した物です。

次の⑤番は新しい物ですけれど、宋代の帯の形と云うことで、「玉鑄大帯」というものです。「公服所佩的革帯。是區別官職重要標識志之一、…宋朝唐朝制度、公服使用大帯」、公服所佩の革帯とあります。官職を区別する重要な標識だと書いてあります。唐の制度を受けたと、公服にこの大帯を使用したということが、中国歴代の役職のそういった文献に出てくる訳ですが、このようなものを参考までにといいまして、異国の帯の形等も含めてご紹介いたしました。

本当ですと、せめて上海博物館の白玉の写真を…と、思ったのですが、しかし、もう一度上海に行くこともできず、載せることは叶いませんでしたけれど、今度、ご旅行されることになりましたら、上海博物館の玉の部屋に行かれると非常にすばらしい玉が様々置いてあります。そのまた文様にも非常に様々な意味があろうと思っております。

時間が推してしまいましたが、色々な思いを伝えたい。それだけはわかって頂けたのではないかと、ちょっと少し安心できるかどうかわかりませんが、皆様の心の中に平安期というものが、この六ヶ所村と繋がっているという印を是非お目になさって、心に留めて下さい。そして、私の思いを述べて終わりいたします。どうもありがとうございました。（拍手）